

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある日、降り立った町の駅前で見わたすと、そんなつもりではなかったのに、目に映るすべての文字が皆目理解できず、すっかりうろたえたという経験を、一度限りだが、味わったことがある。ベルギーのブリュージュという町にいったときのことだ。どこかに何なりと、こちらに分かる横文字が目にとまれば、たちま忽ち安心できたにちがいない。だが、駅の昇降口、待合室、玄関に見える表示が、すでに悉皆しっかいフラマン語の単語ひとつきりで、私に分かるフランス語あるいは英語が併置されているということが全くなかった。空腹だったので、物の匂いを頼りにうす暗い構内をすすむと、待合室があった。ドアの向うに食堂が控えていることはすぐ分かった。しかし、見なれた「レストラン」という字はやはり書かれていない。フラマン語の看板を綴り字どおりに低く発音してみると、それは鱈皮わにのような舌触りで、アルファベットの並び加減もまた、聖書に出てくるあのレヴィアタンという海獣のように尾を突っ立て、牙をむいているような感じがした。レヴィアタンのなかに入って食事を摂る気は消え失せた。

問 傍線部「鰐皮のような舌触り」とはどういうことか。最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

1 フラマン語の発音が非常に難しく、あたかも鰐皮をなめているような違和感を覚えたこと。

2 フラマン語で書かれた看板の文字を発音すると舌が鰐皮のようにざらつくのを感じたこと。

3 フラマン語の看板の文字がまるで鰐皮のようにざらざらした気持ちの悪いものに見えたこと。

4 意味が分からないフラマン語に対する苛立ちのあまり、鰐皮を噛むような抵抗を感じたこと。